奨学生レポート

多田野奨学会 2023 年度第 1 号
岡拓杜（東京大学 4 年）

問題“不”解決型学習講座②

――哲学の問題は未解決にすべし――

前回の「問題“不”解決型学習講座」では、生徒に“もやもや”を植え付けるべしというテーマで、まさに講義名が表すような「問題を解決しない方がかえって学習になる」という逆説を提示してみました。そこでは、生徒にいかに“もやもや”させるかということについて論じてみたわけですが、そんなことを考えてみた当の本人もまた、相変わらず“もやもや”しております。「相変わらず」と言ってみたのは、一年前のレポート「大人になるということ―役に立つとか立たないとか」でも私の“もやもや”として延々と書いていたことを、いまだに引きずっているからです。その“もやもや”とは、「役に立つ」あるいは意味があることをなせと社会では言われるけれど、そもそも何かに意味があるということ自体がナンセンスなんじゃないかというある種のニヒリズム（虚無主義）のことでした。この理由については、友人から不評を買うほどの長文で前のレポートに記しておりますので、ここでは割愛いたします。１年前はこの虚無感に対して、何かをし続けること、行為の連鎖を断たないことという処方箋をインドの聖典から導き出しましたが、卒業という節目もあと半年後程度に迫る中で、再び人生の意味とは何かという答えのない問題に“もやもや”するようになりました。実は、今回の“もやもや”は、前とは少し異なり、私が拠り所にしていた哲学それ自体に対する不安感の表れです。

最近、明白に意識し始めたのですが、この不安の正体が実は哲学という営為そのものがその根源に抱えている解決不能な“もやもや”であるような気がしてきたのです。いきなりですが、プラトンの『ソクラテスの弁明』から、ソクラテスの言葉を引用してみましょう。当時、ソクラテスは、デルポイで「ソクラテスほど知恵のある者はいない」と神託を受け、そのことの意味を考えていました。

> この人間より、わたしは知恵がある。なぜなら、この男（筆者注：アテナイで最も知恵があると評判の者。ソクラテスは論駁してしまった）も、わたしも、おそらく善美のことがらは何も知らないらしいけれど、この男は、知らないのに何か知っているように思っているが、わたしは、知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている。だから、つまり、このちょっとしたことで、わたしのほうが知恵があることになるらしい。つまり、わた

しは、知らないことは知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしいのです[10]。

これが有名な「無知の知」の出所となったことは言うまでもないでしょう。ここで言われていることは「もしかして、自分の考えって間違っている？自分って何も知らないのでは？」という絶えざる疑問の中に身を置く必要性ではないでしょうか。プラトンは中期に入ると、いわゆるイデア論によって、こうした現実世界の曖昧さから、真理を救い出そうとしますが、その背景には、こうした「自分は誤っているのではないか」という無知の可能性に対する危機感があったのでしょう。井筒俊彦という哲学者は、このようにまとめています。「人間知性の正しい行使、厳格な思考の展開、事物の誤りない認識のために、「定義」の絶対的必要性をソクラテスが情熱をもって強調して以来、思惟対象あるいは認識対象の「本質」をきわめるということが西洋哲学伝統の主流の一部となって現在に至った[11]」。井筒はこのようにカッコよくまとめていますが、誤解を恐れずに言えば、哲学者はソクラテス以来、誤りのない真理に至るとは、そのために不可欠な「本質」を見抜くにはどうすればよいのだろうかと“もやもや”してきたということです。

この問題に正面から向き合った哲学者としてデカルトが有名です。「２＋３＝５」という一見疑いようのない事実さえも、「欺く神」によって絶えず計算間違えさせられた結果に過ぎないのではないか。もしそう疑えてしまうなら、それは確実とは言えない。そのように確かな真理を追い求めた先に「我思う、ゆえに我あり」があるようです。デカルトは、哲学史上、最も批判と誤解の対象となってきたと言っても過言ではありませんが、後期課程に進学してその哲学史上の意義を学んで以来、デカルトは私にとって非常に尊敬してやまない哲学者の一人になりました。その理由について、ここでは詳しくは述べませんが、彼の方法論を示したとされる『方法序説[12]』を読めば納得していただける方は多いのではないでしょうか。数学や哲学における業績とは反対に、『方法序説』におけるデカルトは非常に謙虚であり、その姿勢から生み出された文章は、箴言に富んでいます。

---

[10] プラトン「ソクラテスの弁明」『ソクラテスの弁明ほか』、田中美知太郎・藤澤令夫訳、中公クラシックス、2018 年、21d（中学生か高校生の時に人生で初めて読んだ哲学書で印象に残っています。この「無知の知」は無知であることを知っているという知識ではなく、「知らないことを知らない」という真摯な態度のことです。詳しくは熊野純彦先生の『西洋哲学史―古代から中世へ』をご参照ください。）

[11] 井筒俊彦『意識と本質』、岩波文庫、1991 年、７頁（大学３年生の初めにこの本を手に取った時の衝撃は忘れられません。サルトル、老子、ナーガールジュナ、イブン・アラビー、松尾芭蕉といった思想家・文芸人が、時空間を超えて同じテーブルに座って話しているのを聞くことができる、そんなマジカルな感覚を味合うことができます。）

[12] 日本語訳を読んであまりに面白かったので、大学院入試の勉強も兼ねてフランス語の原文を読み始めました。1 年半ほどブランクがありましたが、難解なデカルトといえ、普段読んでいるサンスクリット語より、何倍も読みやすく、改めて古典語の難しさの次元の違いに驚かされました。

ところで、その学識高いデカルトは、意外にも、文献による学問を無益だとして、書物を捨て、「世界という大きな書物」をめぐるために旅に出たと言われています。『方法序説』にはこのような“もやもや”が記されています。

> 私は幼少の頃から文献によって育てられた。そして、文献を手段として、人生で有用なすべてについて明晰で確かな認識を獲得できると説得され、文献を学びたいという強い願望を持った。しかし、修了して学者の地位を得ることになっている学業の全課程を終えるや、私は全面的に見解を変えた。実際、私は多くの疑いと誤りで困惑していた。自己を教育しようと努めても、ますます自分の無知を見出すだけだった。それ以外に益はないように思われた。それでも、私はヨーロッパで最も名高い学校の一つにいたのである[13]。

ここにも「無知」が出てきました。当時教えられていた学問には飽き足らず「奇怪で稀有とされる学問を扱う書物もすべて手当たり次第に読破した」というデカルトに比して、あまりに凡庸で怠惰な自分が、こう言ってしまうのは不遜ではありますが、「自己を教育しようと努めても、ますます自分の無知を見出すだけだった」という言葉が、私の“もやもや”に重なるような気がします。つまり、どれほど学んだとしても、何か絶対的な「真理」に辿りつくことは決してなく、ただ、自分あるいは人間そのものが根源的に何も知らないということ、つまり「基礎付け」を欠いているという事実のみを思い知らされるということです[14]。ただ、「私たちは原理的には何も知らない[15]」と思うこと、つまりいわゆる「無知の知」をもって、「ソクラテスほど知恵のある者はいない」という神託に自分を重ね合わせるような慢心は、私を誘惑しがちです。そのような開き直りによる慢心からは、論破王以外の職業を見出し得ないでしょうが、一方で、デカルトが成功させたかのようにも見える第一原理も、さまざまに批判されてきたように、やはりうまくいきませんでした[16]。

---

[13] ルネ・デカルト『方法叙説』、小泉義之訳、講談社学術文庫、12-13 頁（ここでは「序説」ではなく「叙説」となっていますが、フランス語では discours で、英語で言うところの discourse に当たるものですから、その訳の方がしっくりくる気もします。詳しい事情は訳者解説に書かれています。）

[14]デカルトは、万学の「基礎付け」を哲学に求め、「我思う、故に我あり」という原理に到達したと述べましたが、ここでも持続する確かな「自己」があるというより、そう思う都度に確かであるという程度で、その後の演繹には絶対に間違えることのなく信用できる神を必要としました。その第一原理だけでは、うまくいかないのです。

[15] 普段の日常生活や社会を成り立たせている諸々の知識体系を否定したいのではないということを意味して「原理的」と述べました。日常生活や社会を生きる上で、常識は無批判に受け入れられる必要がありますが、その常識を疑うこと（例えば今、夢/錯覚を見ていないと言い切れるのか）ができてしまう以上、「原理的」には、基礎付けを欠いていると言わざるを得ません。

[16] 同時代にスピノザという哲学者がいましたが、彼は「自己原因」「神」「実体」などを定義して、そこか

デカルトは「神」を持ち出すことで、第一原理からの脱出を試みましたが、ニーチェが語ったように「神の死」以後は、そういう「基礎付け」を本格的に欠いた世界での生き方が問われることになります。大学1年生の頃に、アダム・タカハシという哲学者の授業を聴講したことがあるのですが、2024年の「現代思想」(1月号)の中で、タカハシ先生が「神の存在は証明できるか？」という論文を書いています。そこではニーチェやハイデガーにとって、神の不在はメランコリーを引き起こすようなものだったと指摘されています。「メランコリー」というのは精神分析の始祖として有名なフロイトが提唱した概念です。愛する家族、友人、動物を喪った際には、誰もが、深い喪失感を覚えてしまうのではないでしょうか。大抵の場合は、こうした「喪」の状態からなんとか回復することができるのですが、場合によってはその喪失感が強迫的に反復して精神を追い詰めることになってしまいます。この状態をフロイトは「メランコリー」だと分析します。神であれ、なんであれ「基礎付け」を欠いているという“もやもや”は、ある意味で「メランコリー」にも重なるような気もします。

実は、3年前に書いた奨学生レポート「須弥山が見たい！」でも同じような“もやもや”を抱えていたことに最近、気がつきました。そこでは相対主義を克服するために、「須弥山」(インドの宇宙観で世界の中心にある山)という絶対的な「中心」をインド思想の中に見つけるのだという、今思えば幼いけれども純粋で真剣な問題意識を読み取ることができます。つまり、私の大学生活というのは、かなりの部分、この「基礎付け」の問題に「メランコリー」的に囚われていたということになります。実際、ちょうどこの夏休みに考えていた大学院での研究も「基礎付け」に関わっています。ウダヤナという1050年ごろに活躍したインドの論理学者がどのように存在論を基礎付けたのかという方法論に着目して、その哲学的意義と限界を探る云々という研究計画を立てていたところでした。

話が脱線してしまいましたが、この「基礎付け」をめぐる「メランコリー」は洋の東西を問わず哲学史全体を規定し、駆動してきたようにも思われます。しかし、現代的な哲学の知見からすれば、こうした「基礎付け」の問題は人間の理性にはもはや解決不能であり、「語りえぬことについては沈黙しなければならない」というウィトゲンシュタインの言葉は重く響きます。しかし、ウィトゲンシュタインは、「沈黙」すべきことに対しても、人間が向かってしまう衝動があることを否定しませんでした。3年前の自分は「沈黙したくない」、だ

ら幾何学的な公理体系を築こうとしました。それもまた成功しているかのように見えますが、『知性改善論』という彼の方法論を記した著作が未完に終わったことが象徴するように、人間は理性だけに頼って、全ての「基礎付け」を行うことはできず、絶えず超越的な何かを必要としてしまいます。スピノザはある意味でなんとか超越せずに基礎付けをしようとしたのでしょうが、苦悩した痕跡が同書に読み取れます。カントは超越論的なある種の(未？)解決をしました。この事実は「問題“不”解決型学習講座」にふさわしいかもしれませんが、西洋哲学は全く専門でないので、あまり語らないようにしたいと思います。ちなみに、専攻しているインド哲学の文献をあまり出さないのは、読者にとって馴染みがないカタカナの羅列だと煩わしくなると思ったからです。また私の語学力ではまだ原文を手軽に引用できないのもネックです。

から「須弥山」を見つけようという短絡的な思考に陥っていました。今は「沈黙しなければならない」という言葉の意味が前にも増して重く感じられます。しかしだからと言って、そのまま沈黙するわけではありません。むしろ、その難しさを知ってもなお、なんとか語ってみようという態度は重要なのではないかと思っています。どちらも何かを語ろうとしている点で似ていますが、前者が自分が才能によって成し遂げるという慢心に基づいたものであったのに対し、後者は、あくまで必要悪として問い続けなければならないという問題意識に裏付けされている点に重要な違いがあります。

ここまで来ると、「哲学の問題を未解決にすべし」という意味は、もうお分かりでしょう。哲学の問題、特にこの「基礎付け」の問題は原理的に人間には解決できません。このことから、そんな解決できない問題に囚われ続けるのは時間や労力の無駄だ、世の中には解決すべき問題が他にたくさんあるのに、何の意味があるのかとおっしゃる方もいらっしゃるでしょう。そのご批判は全くその通りです。私自身、その問題を痛切に実感しています。しかし、その「解けない問題を解こうとすることに何の意味があるのか」という問い自体もまた、解けないのではないでしょうか。というのも、無意味だと言ってしまえば、それで済むのかもしれませんが、そうなると、私たちがここまで議論してきたこと全てが無意味だったということになってしまいます。しかし、読者の方々の中にも、この一連の議論を通して考えることがあったという方もいらっしゃるのではないでしょうか。つまり、問いは問いを生み出します[17]。むしろ、問題を解決してしまうと、新たな問題に気づけなくなってしまいます。

核兵器廃絶を訴える「ラッセル＝アインシュタイン宣言」で有名なラッセルという哲学者は、「良き哲学者であるためには、「自分はすでに知っている」と信じることを強く警戒しながらも、知りたいと強く望まなければならない[18]」と書いています。「解けない」と開き直って解決したことにしまうこと、あるいは「解けていないのに、もう解けてしまった」と思い込むことよりも、解けないかもしれないけど解こうと強く望むことの方が、良いのではないでしょうか。こうした姿勢は、ローティやドゥルーズといった哲学者にも繋がるでしょうが、それについて論じるのは今度の講座にして、今回はここらで締め括りたいと思います。

次回は「無知なa_kをバカにする無知なa_{k+1}をバカにすべし」という際どいテーマで、知らないことをその通り知らないと思っていることについて掘り下げてみたいと思います。

---

[17] 先ほど紹介した現代思想（2024 年 1 月号）に「問いを問うを問う」という入不二基義先生の論文が収録されていますが、そこで明晰に語られていることがここに繋がってくるような気がしています。

[18] バートランド・ラッセル『現代哲学』、髙村夏輝訳、2014 年、12 頁（訳者の髙村先生の授業を大学 1 年生の頃に受けました。テーマは心の哲学で授業はもちろん面白かったのですが、自分がやりたいことは分析哲学なのだろうかと悩む良いきっかけとなりました。やっぱり大陸系かと思ったのですが、今の時代、その二分法に囚われても仕方ないので、最近は分析哲学についても色々と学ぼうとしています。特に、記号論理学をなんとか習得したいと思っています。）